

SONRISA

# そんりさ

vol.172



3月8日、国際女性デー、チワワシティで行われたデモに参加したララムリ女性たち

ナルコ回廊再び～北部最前線

02	メキシコ・ナルコ回廊再び～北部最前線 2020 その1	……山本 昭代
06	ニカラグア・ワスパンでスマホでビデオ制作	……溝口 尚美
11	回想のラテンアメリカ コロンビア編2	……唐澤 秀子
13	ペルー音楽 リマのアルテルナティボ・ ミュージック・フェスに行ってきた	……水口 良樹
16	ラ米百景 ホセ・マルティ像を豚の血で汚辱	……伊高 浩昭
17	メキシコ料理 メキシコ風ひき肉コロッケ	……ミゲル・アクーニャ
18	ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み	……小林 致広

2020年4月11日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

# ナルコ回廊再び～北部最前線 2020 その1

山本 昭代

この春のメキシコの旅では、北部チワワ州とシナロア州を訪れた。メキシコ経由でアメリカ合衆国に運ばれる違法薬物の大部分が通過する、ナルコ回廊の中でももっとも重要な地域のひとつ。それだけにつねに緊迫感に満ちている。今回はチワワ州、次回はシナロア州と2回に分けてレポートしたい。

## 走る民族ララムリ

3月1日、チワワ州南西部、タラウマラ山脈の溪谷の町、ウリケでウルトラマラソン大会が開催された。長距離走に秀でた「走る民族」として名高い先住民族ララムリとともに、山道を80キロ走るというもの。世界のウルトラランナーの間で、「死ぬ前に一度は走りたい」大会のひとつに挙げられる。これに参加してみたい、というのがじつは今回の北部周遊の動機でもあったのだが(笑)。

メキシコシティから飛行機でチワワ州の州都チワワシティまで約3時間。1泊してチワワシティから始発バスに。約7時間で高地の町バウイチボに着き、そこで乗り換え。ガードレールも何もない、急カーブが連続する険しい山道を、中古のスクールバスがブンブンうなりながら下っていく。

海拔約2,000メートルから500メートル弱の谷底にあるウリケの町まで約2時間半、一歩間違えば谷底に転落しそうな急な坂道が続く。身を守るすべなどないので、ひたすら窓枠にしがみついで祈るしかない。

しかし、窓外の景色は目を見張るほど。グランド・キャニオンのような溪谷美に加え、針葉樹しかなかった寒冷な高地から溪谷を下るにしたがって植生が多様化し、木々には色とりどりの花が咲き、パンヤの木が綿毛をつけているのが見えた。まさに桃源郷。

隣に座っていた女性はウリケに長く勤める中学教師で、明日は大会で医療班を担当するという。ウリケの町はまったく安全で、ナルコがらみの事件など起こったことはない。ウリケの行政区は広いので、ときどきニュースで名前が出るが、別の場所のことだ、と語ったが…。



伝統的なララムリの男性の衣装は、カラフルなギャザーシャツ、バンダナ、白いふんどし、古タイヤを使ったサンダル。



女性たちは色鮮やかなブラウスとロングスカートで走る。寒いときは上にセーターやショールも。

ウリケは人口約3,000人の白人系の町。外界から隔絶された辺鄙な町だが、インターネットカフェも1軒あり、生活に必要なものはひととおりの何でもそろそろ。近くに鉱山があったために、人々が移り住んできた。周辺の溪谷に暮らす先住民族ララムリは、その多くはまとまった集落を形成せず、家族ごとに溪谷のあちこちに家屋を建てたり、ときには洞窟を利用して住居としている。

前日受付と前夜祭で、多くのララムリの人たちが集まっていた。男性たちの多くは白いふんどしにワラーチと呼ばれるサンダル、女性たちはカラフルなロングスカート。その格好で走るのだ。ララムリの人たちは皆恥ずかしがりやで、話しかけてもほとんど返事をしてもらえない。

先住民のランナーは参加費が無料で、走った距離に応じて食糧の交換券が支給されることになっ

ている。彼ら・彼女らにとって大会で走るのは、民族としての誇りとともに、食糧を手に入れるためでもあるのだ。

翌日の大会は、何とか12時間余りで無事完走。急な山道の上下りと砂利道のおかげで、脚は完全に売り切れ(ボロボロになっ)てしまったが、ボランティアの人々に励まされ、最後は笑顔でゴールできた。絵のように美しい景観の中、色とりどりのシャツやスカートを翻して風のように駆けるラムリの人たちと一緒に走れたのは、生涯忘れられない体験だった。

### 組織暴力の抗争地帯

チワワシティに戻り、NGOの女性人権センターにガビノ・ゴンサレスさんを訪れた。センターはもともと文字通り女性の人権擁護のためのものだが、行方不明被害者の家族からの相談も多く、その担当をしているのがガビノさんである。組織犯罪がらみの暴力の被害者への支援活動にもかかわっている。

ガビノさんに「ウリケは平和だと言われた」と話すと、「そんなことはあり得ない」と、即座に否定された。ウリケ周辺はシナロア州との州境に近いだけに、シナロア・カルテル系とシウダー・ファレスを根拠地とするファレス・カルテル系の犯罪グループ間の抗争には事欠かない。実際、2015年には地元で敵対する武装グループの抗争によって、大会が中止になったことがあった。このときは住民2人が殺害され、警察官1人が行方不明になった。

2018年には、アメリカ人のスペイン語教師の青年がウリケで行方不明になった。家族やアメリカ政府が捜査に乗り出し、大騒ぎになったことから犯人らが恐れをなし、埋めていた遺体を掘り出し、失踪から22日後にようやく発見された。地元マフィアがアメリカ人捜査官かと疑い、拷問して殺害したのだった。あとでネットで新聞記事を読むと、遺体の発見場所は、マラソンで走ったコース上のようだった。

それに加えて2019年11月には、チワワ州とソノラ州の州境で、米国籍のモルモン教徒の女性3人子ども6人が虐殺される事件が起きたのである。アメリカ政府はチワワ州への旅行中止の勧告を出

し、アメリカ人観光客は激減した。今回の大会も、かつてならリトル・アメリカの様相になるはずだったが、アメリカ人参加者はごくわずかだった。

### 暴力が支配する山岳地

ちょうどセンターでは、アムネスティ・インターナショナルの担当者が来て、マフィアの暴力にさらされている山岳地帯の先住民村の住民のために、3日間にわたって人権学習会を行っているところだった。

村は、チワワ州南部、ドゥランゴ州とシナロア州の州境に近いコロラド・デ・ラ・ビルヘンという。交通機関がないため、徒歩で1日歩き、それからバスを乗り継いで、2日かけてチワワシティに来たという。村での暴力から逃れてチワワシティに移住していた人たちも加わっていた。

学習会といってもスペイン語の理解が不十分だったり、読み書きが苦手な人も多いので、皆で絵を描くなど工夫しながら、村での現状を再確認し、自分たちの権利を守るために何ができるかを自ら考える、という自己啓発活動である。

2000年代以降の村での出来事を描いた年表を見せてもらった。貧しい山村の人々がいかに理不尽な暴力の犠牲になっているか、驚くほどだ。

まず、カシケと呼ばれる地主。村の人々との間で土地所有を巡って対立している。鉱山開発業者が進出してくると、カシケは勝手に村の土地の開発許可を与えてしまった。

そして、村の土地に入り込んで麻薬物を栽培するマフィアである。これは武装グループを従えており、村人が何人も殺害され、多くの家族が家を



コロラドの村人が描く村の地図。中心には教会、その脇には武装グループに焼かれ炎を上げる家。村周辺に麻薬畑が。

焼かれ、村から追い出された。村を守るために働いていた活動家らは次々に殺され、「もう私たちを守ってくれる人がいなくなってしまった」という。

翌日は村の地図を皆で描いた。村人のトウモロコシ畑に隣接して、麻薬物の栽培畑がある。なんと、村の中にマフィアが作った秘密滑走路まであるのだ。道路が未整備な山岳地だけに、大量のマリワナやケシの樹脂を運び出し、栽培のための資材を搬入するにはセスナが不可欠、ということなのだ。

村には小学校も診療所もあるが、5、6前に暴力が激化してからは、教師も医師も恐れて来なくなった。就学年齢の子どもは20人くらいいるが、別の村の学校までは徒歩で2時間もかかるので通えない。やむなく家で親の手伝いなどしていて、文字の読み書きも習えないままだという。病人が出たときは、車を頼んで近くの村の診療所かチワワシティまで運ぶしかない。

川があり、水は豊富だが、電気が来っていない。電話もない。携帯電話は、山の高いところまで登らないと電波が入らない。政府の貧困対策事業も農業支援も届いていない。警察を呼んでも来るのは2日後である…。その警察も実際のところはマフィアと共謀している。

まさに陸の孤島にして四面楚歌、国家から遠く切り離された存在である。21世紀のメキシコで、いまだにこのような村があるとは。

村を支援するNGO、「アリアンサ・シエラマドレ」代表で、長年タラウマラ山脈で活動している人類学者のイセラ・ゴンサレスさんによると、状況はさらに複雑である。村の人の中には、アヘンゲシの収穫などに働きに行く人もいるというのだ。実際、山の中でほかに仕事はなく、行けばいい日銭が稼げる。庭先でこっそりマリワナを栽培する人もいる。その場にいた女性も、「マリワナ畑で働くと、なぜかすごくお腹が空くのよ」と笑って話した。先住民族の人たちは、ナルコの被害者であるが、一部では共犯者でもあるのだ。

ウリケのマラソン大会で、ララムリの青年たちがハッピー柄の野球帽やバンダナを身につけていたことを思い出した。粋がりたい年頃だけに、麻薬畑に働きに行くこともあるのかもしれない。違法薬物の生産が根付いているこの地域では、底辺の



コロラドの村人の「強み」。ララムリ語を話すこと、団結、知性、友情、家庭、明るさ、足が速いこと。

人々にとっても、それが経済を下支えしているという現実がある。

### 支え合う被害者家族

センターでは毎週末、行方不明被害者の家族が集い、語り合う会が開かれている。コロラドから来た人たちが帰って行った日曜日、チワワシティから西に約100キロ、州内で3番目に大きい街のクアウテモクから、約20人がやってきた。男性は2人だけで、あとはみな女性だった。

クアウテモクはタラウマラ山脈の入り口にあたり、リンゴ栽培が盛んな農業地帯だが、ガビノさんによると最近麻薬密輸組織の暴力が再燃しており、今年1月だけで30人も行方不明者が出ている。3月現在になっても、その誰ひとりとして発見されていない。

センターのスタッフが、女性たちが連れてきた子どもたちを近くの博物館に連れ出し、大人同士が落ち着いて話し合える環境を整えた。スタッフが、「話したい人は話し、話したくない人は話さなくてよい。ここで聞いた話はほかには漏らさない」など、基本的なルールを伝え、フリートーキングが始まった。

女性のひとりが、こう口火を切った。「ここに来るといって、夫は、『何で行くんだ、何の役に立つ?』という。でも私はこういう。『あんたは息子をお腹の中に9か月も抱えていなかった。私はあの子の母親だ。最後まで私はあの子に責任の持つ』と」。

別の女性も、「友達が、『死にたい、会合にも行き

たくない』という。でもだから行くのよ、と誘ったのだけど。私も息子が行方不明になって絶望していたが、ここに来たことでいろいろなドアを開くことができた」と語った。

そこから、行方不明者家族が体験するうつ状態に話題が移った。うつ症状から自殺未遂を繰り返す人、引きこもりになる人もいる。精神的な落ち込みはほかの病気につながることもある。

ひとりで参加していた男性は、「息子が行方不明になって以来、妻はうつになって、長くベッドから出られなかった。やっとそれが改善したと思ったら、今度はがんの診断が出て、手術することになった。ここに来たいというが来れない状態だ」と話した。スタッフが、「それでは私たちが訪問しましょう」と話した。

親が行方不明になったことは、子どもにも深刻な心の傷を与える。ある女性は息子が行方不明になったあと、「復讐してやる」と話していた甥までもが行方不明になった。その甥には、妻と18歳、12歳の息子2人いるが、みな家に引きこもって何もしていない。子どもたちはベッドの中で1日中ゲームをしているようで、風呂にも入らず、家は汚れ放題だ。下の子はたまに学校に行くが、休みがち。父親が行方不明になる前、家に男が来て父親の仕事先や帰る時間を尋ね、上の子がそれに答えてしまった。それで自分を責めているのだろうという。犯罪犠牲者に対する政府の支援金は出ているが、母親は金が入ると食べ物より趣味のバービー人形を買ってしまう。そのせいで子どもたちはろくに物も食べていない…。

カウンセリングのトレーニングを受けているスタッフはそれを受け、「バービーでもなんでも、なにか関心を持つものがあるのはよいことだ。それが生きる希望につながるから。私たちも何ができるか、一緒に考えましょう」と引き取った。

時間になり、司会が会の終了を告げようとしたとき、それまで沈黙していた一人の女性が突然、堰を切ったように語り出した。

「息子が行方不明になって以来、何もする気にならず、夜も眠れない。犯人とされる男が捕まったが、裁判官は組織を怖がってなにもできないでいる。私は毎朝、もしかしたら何か分かったと電話があるかもしれない、今日こそ息子のことで連

絡が来るかもしれない、とそれだけを考えてベッドから起き上がる。それだけのために毎日生きている…」と涙を流した。その場にいた人はみな涙し、隣に座っていた女性がポケットティッシュを手渡した。

行方不明の家族を持つことは、毎日終わりの見えない苦しみを抱えることでもある。それは同じ立場の人同士でないと理解しえない。ガビノさんは、「人々は家族を失ったが、ここに来て新しい家族に出会うのだ」と語った。

## 声なき声を聴く

この日、3月8日は国際女性デー。日本では新型コロナウイルスのためにイベントは中止されたようだが、メキシコでは各地で大規模なデモが繰り広げられた。チワワシティでも、数千人の女性たちが、女性への暴力に抗議するため、パープルカラーのスカーフやシャツなどを身に着け、プラカードを手に、中心街をにぎやかに行進した。

デモの中にはごく数人だったが、はにかんだ表情のララムリの女性たちの姿もあった。語られることは少ないが、先住民社会の中でも家庭内や集団内での女性への暴力がある。さらに麻薬栽培地帯を支配する犯罪組織の間では、女性への性的暴行が必ずといっていいほど起こっている。無口なララムリの女性たちは、それを口にするのがないだけである。シュプレヒコールの嵐の中には、その声にならない声も混じっている。被害者と同じ苦悩を共有することはできなくても、想像することで連帯していく必要がある。



国際女性デーのデモ。「明日死なないために、今日たたかう」

# ニカラグア・ワスパンでスマホでビデオ制作

溝口尚美（映像作家）

2020年2月12日から5日間に渡り、ビデオ制作のワークショップが中米ニカラグアの北東部に位置するワスパンで行われた。

この辺りはミスキート民族が多く暮らす地域で、ワンキ・タグニ（ミスキート語で「川の花」の意）の団体の人たち、加えて東部海岸沿いのプエルト・カベサスという街から、CADPI というコミュニティメディアの人たち、合わせて17人が参加し、3作品が完成した。

そのプロセスをレポートしたい。

## スマホの利点と欠点

私は、コロンビア・エクアドル・ネパールで先住民に映像制作を伝えてきた経験はあったが、すべていわゆるカムコーダー（ビデオカメラ）と三脚を使っていた。自分の映像制作も9割9分はカムコーダーで、スマホは補助的にしか使ってこなかったの、スマホだけで低コストに良い映像を撮る方法を考えることが、私の最初のチャレンジだった。

最近のスマホの映像のクオリティはかなり良く、4K撮影もできる機種があるので、撮影技術さえ習得すればプロにも劣らない映像制作は可能である。手で持つとどうしても揺れが多く不安定な映像になるので、それは三脚付きの自撮り棒を購入することで解決できると考えた。

次の大事なポイントは音である。きれいな音を録ることで、素材のできに格段の差がつく。リサーチしたところ、Rode社で50米ドルほどの風防付きショットガンマイクを見つけたので、三脚付き自撮り棒と合わせて購入することにした。撮影用に新たに購入した機材は、この2つとスマホ用のminiSDカード2枚（2グループ用）、合わせて100米ドルほどだった。

なんといってもスマホの利点は、持ち運びが簡単で機動性があること、カムコーダーに比べて被写体に威圧感を与えないことである。逆に欠点は、カメラが軽いので揺れやすいこと、明るさやピントの調整がしにくいこと、ショットガンマイクを



ワスパンにあるココ川



庁舎での上映会後の参加者（撮影：柴田大輔）

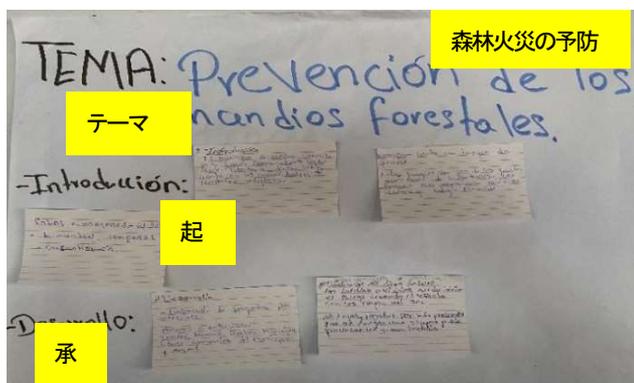
使っているとはいえ、被写体に近い距離（バストカウエストショット）でないと、クリアな音が取れないことである。ピンマイクを被写体に取り付けたり、延長コードを使ってブームマイクにするなど、別の方法はあるのだが、今回はコストパフォーマンスと機動性を優先して、その方法は取らなかった。



## 撮影前に構成を作る

テレビに代表される商業メディアと差別化して、今回のようにコミュニティレベルでコミュニティのために行うビデオ制作は、市民メディアと呼ばれる。この20年ほどで、カメラなどの撮影機材は安価で手に入るようになった。また、手軽なネット配信が普及し、今は市民の誰もが自由にビデオ制作して発信できる時代だ。パソコンやソフトウェアの使い方もネット検索すれば、いくらでも出てくるので自分で学ぶことができる。

そんな中、学ぶことが一番難しいのが、ストーリー、つまり構成を作ることである。高価なカメラで綺麗な映像を撮っても、起承転結のない作品は退屈なだけだ。これまでも撮影素材はたくさんあるのだが、どのようにまとめたら良いかわからないという市民に数多く出会ってきた。



インデックスカードを使った構成

なぜ作るのか、誰に見せるのか、どのような展開のストーリーにするのか。事前に構成(計画)を作ると作らないとでは、撮り方にも大きな違いが出てくる。

私自身が経験の中で学んできた方法なのだが、今回のワークショップでは、インデックスカードをたくさん持参し、各グループで撮りたいアイデアを思いつくままカードに書きあげ、それが起承転結のどの部分に相当するかを大きな紙に貼って可視化し、重複する部分や足りない部分は何か、順序を並べ替えてみたらどうなるかを考えてもらった。完成作品は5-7分という目標を設けたので、余裕があれば、分数計算も考慮するようアドバイスした。

CADPIのグループは、普段から放送用の映像制



構成をグループで検討中(撮影:柴田大輔)

作をしているので、ナレーション、そこに当てる映像、分数まで書き込んだ完璧な台本が半日でワードファイルに仕上がっていた。途中、3グループの構成を発表し、ディスカッションの時間も設けた。CADPIの発表は、初心者ワンキ・タグニの参加者にとって、お手本として良い勉強になったのではないかと思う。

ワンキ・タグニの2グループは、「水の汚染問題」と「森林火災の予防」をコミュニティ向けに発信。CADPIは「キサラヤというコミュニティが経済力をつける事例紹介」をコミュニティテレビ局から発信することを目的に制作することとなった。

## 上手な撮影のコツを習得

撮影テクニックに関しては、「光」と「音」の重要性を強調した。

- ① 逆光で撮らない。
- ② アプリは使わず、スマホカメラの付属機能では、明るさやピントの調整ができないため、画角が重要。
- ③ なるべく静かな場所を選び、マイクを被写体に近づける。
- ④ カメラを動かす時は、腕ではなく、自分の体全体を使って動かす。
- ⑤ 柱や壁に寄りかかると安定性が増す。など、良い映像が撮れるコツを伝えた。

またダンボールとアルミホイルを使って、レフ板を作り、コントラストの強いところでは、太陽光を反射して顔の暗い部分に当てる方法を教えて、実際に練習してもらった。ショットガンマイクの有無による音質の違いには、皆、感動してくれていた。



インタビュー撮影の様子



ダンボールのレフ板は、日よけにも活躍！（撮影：柴田大輔）

## いざ撮影

CADPI のグループは、撮影経験者なので自由行動。ワンキ・タグニの2グループには、午前と午後に分けて、同行した。外では充電ができないので、バッテリーがフルであること、Bluetooth と Wifi をオフにして、撮影しない時はディスプレイを暗くすると電池が長持ちすることもアドバイスした。

撮影現場に同行してみると、教え切れていなかったことに色々気がついた。例えば、長いインタビューの時、カメラを全く動かさず固まっていたので、聞くと、「どこで動いて良いかわからない」との答え。そこまで教えていなかったのが当然である。編集では使わない質問の時は、カメラを動かして良いこと。

1つ目の質問がウェストショットだったら、2つ目の質問は、画角を変えてバストショットにしてみる、テーマに関する物（例えば水がテーマなら、汚れた水のアップ等）を撮っておくと編集の時に役立つことなどを伝え、実際に撮影してもらった。

また、村のワイドショットのパン（左右の動き）の画角が中途半端で長かったので、どこからどこまで撮影するか決めて、動かす最初と最後は3秒～5秒止めると良いことを指導した。手作りのレ

フ板は、外光が強くて画面が見えにくい時に、スマホの上にかざし、見やすくすることにも役立った。また初心者になりがちなのだが、両チームとも天空き（被写体の頭の上が空きすぎる）の傾向があったので、注意した。

## 最大の難関＝編集

編集は、アドビ・プレミア・エレメンツという70米ドルほどのソフト（Mac, Windows 用のDVD入り）をワンキ・タグニ用に購入した。私は、プロ仕様のアドビプレミアを使ってきたが、簡易版のエレメンツには、欲しかった便利な機能がなくて、私自身が覚えるのに苦労した。

自分の練習用に手頃なウィンドウズのラップトップを購入し、スペイン語版のエレメンツを入れて持って行ったのが役に立った。1グループにそれを使ってもらい、もう1グループは、最終的にインストールするパソコンがすぐに決められなかったため、お試し版をインストールし、完成品のアウトプットを私のラップトップから行うという手法を取った。

編集作業には「整理整頓」と「忍耐力」が欠かせない。ワークショップが終わった後も、自分たち



アドビ・プレミア・エレメンツの画面



だけで映像制作を続ける技術をつけることが目標なので、これから増えていく素材を整理整頓していくことは、最も大切な点だと思った。だから最初に指導したのが、フォルダー分けである。クリエイティブでない面倒な作業だが、最初にキチンと整理しておくことで、結果的に作業が捗ることを私は経験から学んできた。

アメリカでは、初心者向けの編集のワークショップは、少なくとも3日間は行われる。それを2日ほどで、ミスキート語からスペイン語の翻訳字幕も入れて、完成させるのだから、大変な作業である。「習うより、慣れる」ととにかく編集ソフトに向き合って、素材を繋いでいくしかない。私はスペイン語ができないので、通訳の新川志保子さんと柴田大輔さんには本当にお世話になった。

また、CADPIのメンバーがいたおかげで、編集特有の用語や操作をわかりやすく説明してくれたので、かなり助かった。私もCADPIのメンバーも、自分が作業してしまえば早いのだが、それをしてしまうと、身につかないので、見本を最初に見せて、実際に操作してもらおうという、教える側も学ぶ側も通訳も、「忍耐」の作業を繰り返した。ワンキ・タグニの2グループは、本来は休みの予定だった土曜日でも編集を続けた。編集作業中は、1日に1度、



編集作業中（撮影：柴田大輔）



編集作業中



昼食のひと時

プロジェクトに映して試写を行い、全員で意見交換し、足りない素材を追加撮影しに出たり、ナレーションを録音したり、最終日の4時を目標にギリギリまで作業した。

### 盛り上がった上映会

市民メディアのワークショップで一番盛り上がるのは上映会だ。ワンキ・タグニの代表でありワspan市長でもあるローズ・カニンガムさんの計らいで、職員も招いて市庁舎で上映会が行われた。

上映までもう少しという時に技術トラブルがあり、上映開始が1時間遅れになってしまったが、3作品とも短期間には上出来の作品で、CADPIのメンバーが作ってくれたメイキングビデオも合わせて上映し、大変盛り上がったと思う。各グループのメンバーが上映前に生き活きとプレゼンテーションし、上映後、修了書をもらう様子は、私にも達成感を与えてくれた。



試写の様子 (撮影: 柴田大輔)



ワspan市長のローズさん (右)

## 終わりに

2004年、私は市民メディアを学ぶために、日本からアメリカに移住した。その後、非営利団体を協働設立し、先住民と共に映像制作をする活動を2008年から2014年まで行った。この間、市民メディアを取り巻く状況は、大きく変わった。YouTubeに初めて動画が投稿されたのが2005年。Facebookが普及し始めたのが2006年。AppleがiPhoneを発売したのが2007年であるから、まさにメディアの変革期と言えると思う。アメリカやヨーロッパから数歩遅れていた日本でも市民メディア団体が増えた。特に福島原発事故では、市民メディアが活躍。私はアメリカにおいても東電の記者会見や被災地区の様子を、主に市民メディアを通じて見る事ができた。

今、メディアは新たな変革期を迎えている。これからは、商業メディアと市民メディアの役割が問われる時代だと私は考えている。対抗するのではなく、役割分担が実現すると良いと思う。商業メディアは「鳥の目」で、企業や政府からの大きな資金を使って、世界の出来事を迅速に伝えたり、スポーツなどの生放送やドラマなど、クォリティが高く信憑性のある、プロにしかできないコンテンツを発信し、市民メディアは「虫の目」で、市民だけ

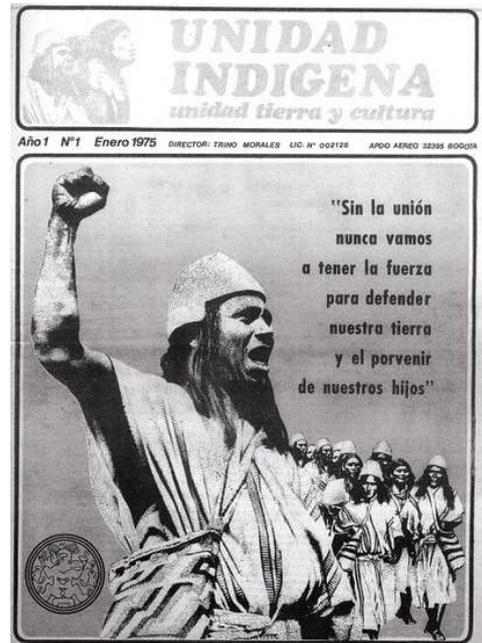
からこそ気づくことや、そこに住んでいるからこそ作れるコンテンツを発信したり、コミュニティのための映像を制作するのである。市民メディアの難関は資金調達なので、投資してくれる人がいるかが継続の鍵だ。できればパブリックアクセスという市民が発信できる権利が世界共通で法整備されることを願う。多様性のある世界が、自然も人間もメディアも健全な姿だと信じている。



上映会の様子

コロンビア全国インディヘナ集会に参加したことから、何人もの知り合いができました。信頼関係ができて訪ねていくことになったのは、カリブ海に面し、ガルシア・マルケスの生地に近いサンタ・マルタの山奥に住むアラウコという人びとのリーダーです。ぜひ自分たちのところを訪ねてくるようにと言ってその場所を説明してくれた時のことを、いまだによく覚えています。長い髪をなびかせ、ゆったりとした白い分厚い手織り木綿の貫頭衣風の衣装に身を包んだ姿は堂々として魅力的です。シエラネバダ山中の或る町までいき、そこから乗り合いのジープでとある村まで行くと、旅籠が一軒ある、それはカソリックの僧侶なども宿泊所に使うそのあたりの唯一の宿だ、その宿からまっすぐ山へ向う車道がある、しばらく行くと川があるから、それを渡る、そしてなお車道をどんどん上る、というような説明を大きな身振り手振りを交えてしてくれたのです。山のなかの車道というのが、妙に印象的で不思議だったのですが、それ以上何も考えず、それからどうやって行く日取りなどを決めたのかは覚えていないのです。

教えられたシエラネバダの町につき、それから乗り合いのジープに乗り込むと、それは不安を覚えるものがあります。ジープの後部はむき出しの枠だけがあるだけで、屋根などは取り払われています。そして板を渡したところに座るわけですが、端に座れば落ちないように枠につかまっていなければならぬようなものです。それに地元の人びとが乗るのですから大きなかごに荷物、鶏も一緒です。晴れて気持ちのよい空の下、出発すると道はすぐ登坂になり、あまり木も生えていない乾いた山肌にはごつごつ岩が突き出しています。目をやると岩のうえに大きなイグアナがのっそり首をめぐらしてジープを見ているようですが、一向に動く気配はありません。よほど間近まできてようやく岩からのそりとどこかへ消えていきます。しばらくするとぽつぽつと雨が落ちてきて、あっというまに土砂降りになり、さきほどまで乾ききっていた坂道にはどーっと水が落ちていきます。そして行く手に川が。川といっても最初は足首くらいまでの流れが、見る間に嵩を増して



CRIC機関紙 "Unidad Indígena: unidad tierra y cultura"

『先住民の団結：団結、土地、文化』創刊号 (1975年1月)の表紙。アラウコの人びとの背景には、「団結なくして、土地、未来、子どもたちを守るだけの力を持つことはできない」との文字が浮かぶ。

いくのです。でもそれを渡らなければ先へは進めない。ジープはしばらく川を前に止まっていたましたが、えいやっという勢いで流れに乗り入れました。あれ一、と思う間もなく水のなかで止まってしまう、いくらエンジンをかけてもびくとも動かないのです。地元の乗客はあー、やれやれというくらいの感じで騒ぎもしないで乗ったままなので、きっと大丈夫なのだろうなと思っても、水の中でどうなるのだろうと内心は不安が…

するとそのとき後ろから勢いよく一台の車が水の中へ乗り入れてきたのです。運転手は「あ、教会の坊さんの車だ、エンジンが強いから頼もう」と慣れた様子で言い、また後ろから来た車の運転手も慣れた様子で降りてきてロープで乗り合いジープをつなぎ、グリーンとスピードを上げて走り出し、われわれのジープは無事対岸へ着いたのです。振り返ってみれば、川は相当な水嵩になっていて、あんなところで立ち往生していたらどうなったのだろう、こわいなと思ったのですが、それから3日後の帰り道、あの川であったところまで来てみると川などな

いのです。ただちよろちよろとわずかな水が流れるというほどもない、ただ溜まっているくらいの水があるばかりでした。

ようやく宿についたときはもう夕暮れ時だったでしょう。こんな山奥に何しに来たのかね、観光するところもないしねと宿のおかみさんに不思議がられても無理はないのです。ここにたどり着くまでに出会った人びとの眼差しには、先住民が自分の土地の権利を主張するなど、とんでもない思い上がりだという意識と、彼らと一緒に話などしている東洋人は何者だと不審がられ、当局にもそれとなくチェックを受けていることも感じ取っていたからです。明日はアラウコまで行くと答えると、それこそあそこには何も無い、泊まる場所もない、やめておいたほうがいいよ、と忠告されます。私たちのほうも、先住民の権利回復のために戦っているアラウコの人びとに会いに行くなど、とても口にはできませんし、ましてこの宿には抑圧の象徴のようなカソリック教会の神父も泊っている、と聞いているので警戒心が募つてばかり、何気ない風を装って当たり障りのないことしか口にしてはいけな、と緊張していました。

翌日、心配するおかみさんに感謝しつつ、宿を出ました。山を登る道はたしかにありました。山の踏み分け道です。ですがよく人が通るに違いない、はっきり跡のある道です。彼にとっては都会の車道に相当する山へ登るメインの道に違いありません。途中の川には丸太を切ったものがとびとびに配置されていましたが、リュックを背負った私にはとても跳びきれるような間隔ではなく、結局水のなかを歩いて渡ったのです。それでも迷うことなく山中の集会のための家にはたどり着けたのです。そこには彼が待っていてくれました。彼は私たちが宿を出て道を上ってくるのが見えたと言って笑っていました。

彼らの村がどんなふうに自治運営しているかを最初に少し説明してくれ、明日はそのための話し合いの寄り合いをすると、みんなで話し合っ決めていくのだといい、村の生活を乱すようなことや、罪を犯したとき罰として閉じ込める、いってみれば監獄ですが、集会所の近くにある小屋に案内してくれました。ほんの1、2坪の大きさの屋根も壁も萱のような草でふいたばかりの小屋といったらいいでしょうか。萱をとおして外も見えれば風も吹き抜けていく開放的な、牧歌的な小屋です。コロンビア国

家の法律とは別に、先住民独自の慣習法が生きている現実を知りました。集会所に戻り、数人が集まってきて彼から私たちのことを説明してくれているようでした。今夜はここに泊っていけと彼は言うてくれるので、そのまま話しつづけていたのですが、夕方になり外は暗くなってきても食事という段取りにはならないのです。彼らの生活、予備の食物などあろうはずもない現実を感じさせられます。リュックに入れてあったイワシの缶詰、クラッカーのようなもの、持っていた食料を全部出してその夜の晩御飯にしたのですが、元気よく食べる彼らの様子に思いがけず持っていたものが役に立ってよかったです！

彼らに少しでも好意的であったり社会的な公正さを持つ政府機関の役人を自分の都合の良いように追い払い、意のままになる役人を従えて横暴なふるまいを繰り返す政治家たちを相手に自分たちの土地の権利、固有の文化、言葉を守るための日々の闘い、どこそでこんなことがあった、だれそれが不法につかまった、子どもがこんな目にあつた…次から次へとなんとかしなければならぬ差し迫った状況が語られ、夜は更けていきました…

翌朝、かなり朝早くにはすでにその日の寄り合いのために大きな鍋をしょった人が到着しはじめ、わたしたちは名残惜しかったのですが、山を下りました。宿のおかみさんが私たちを心配してお供をするようにと言いつかつた、と言って宿で働く少女がやってきました。

彼女とニコニコしながら、でも少し緊張してお天気の話だの山の美しさなど話しながら下りてきて、宿が下の方に見えるあたりまでやってきたとき、彼女がいきなりハグしながら、涙をこぼして「わたしは、あのリーダーの姪です。こんなところまで来てくれてありがとう。わたしたちのことを知ってくれる人がいるなんて、勇気づけられる」と言ったのです。その時の驚きと喜び、そして自分の鈍感さ！彼女を抱きしめながら、「ありがとうというのは、私の方です」。

先に知り合ったコロンビア南部の土地を取り戻す運動をしている先住民のグループ、そしてここでの出会い、とりわけリーダーの姪との出会いは、「先住民」という言葉でくくられていた像が、ひとりひとりの顔、名前を持った友人に変わったときとなったのです。

## リマのアルテルナティボ・ミュージック・フェスに行ってきた

水口@リマです。今いるぜ、ペルー。日々あつという間に過ぎていってしまうぜ、ペルー（ちょっとテンションがおかしい）。と盛り上がり大満喫の滞在があと1週間というところで、ペルーのビスカラ大統領がコロナにともなう非常事態宣言を発令（3月15日）。翌16日23時59分からすべての国境を封鎖、外出も基本禁止という非常に厳しい状況になってしまった。

私は翌朝慌てて、コロンビアを経てメキシコに抜けるチケットをゲットし、ペルーを脱出したが、コロンビアで外国人は入国拒否され、あえなくペルーに送還されてしまった。そんなわけでまだしばらくリマで息を潜めて、今度は開国を待つことになりそうだ\*1。

さて、それはさておき、今回は、2月29日に開催された「第6回アルテルナティボ（オルタナティブ）・ミュージック・フェスティバル」参加時の感想などをご紹介できればと思っている。このフェスのすごいところは、なんととっても超豪華な出演者。今、ペルーの都市部に住む若者たち（そしてステージ後半は中高年たち！）の心をつかんでいるバンドの多くがここに出場している。

個人的に出場してほしかったが未出場だったのは、フォーク系女性歌手ララー、ラ・サリータの後継バンド、サリータ・コロニア（単に今どうなのかを生で見たかった）、そしてサリータ崩壊後のアンデスフュージョンを牽引したラ・ヌエバ・インバシオンなどだ。あと出ていてもおかしくないものとしては、エル・カナク・イ・ティグレやブラックシュガー、超大物としてはジャン・マルコなどが。

とはいえ、今流行のバンドをパノラマ的に概観できる願ってもないチャンスなので、いそいそと出掛けたわけだ。ところがこのフェス、朝の10時に始まって、夜中の2時に終わるというもので、椅子なし、再入場なし、日陰ほとんどなし、という非常に厳しいコンディション。

私は、朝11時に注目しているバリオ・カラベラが出演するので、開演1時間後に現地入りした。



エキスポシオン公園の会場

会場はまだ人影もばらで、コアなファンだけが朝早くから見に来ているようだった。

正面にステージが2つ並んで設営され、客席から見て右手がロック&ポップスのステージ、左手がインディーズ&フュージョンのステージになっていた。後者は後半サルサやクンビアが目白押しで、実質+トロピカル、といったほうがよいようなプログラム構成だ。ロック&ポップ部門は、ポップスもありつつ、実質かなりロック色が強く、ペルーがラテンアメリカの中でもロックの人気が高い国であることを改めて印象づけられた。

アメンやアウトサイダー、セン（ゼン）、トゥリスタなどコアなファンの多いロックや、リオ、リビドー、マル・デ・コパといった国民的ロックグループも出演していたが、個人的に評価を改めたのは、英語にこだわって活動しているフォーク・ロック・バンド、ウィー・ザ・ライオンだった（15時半〜）。レパートリーの全曲を英語で歌っているバンドで、若者層に人気なのは知っていたが、YouTubeで聴いたときにはそこまでピンとは来なかった。しかし実際にステージを見てみると、出演バンドの中では異色のバイオリンを使った多彩な音色とカントリー的曲調が非常に新鮮で、一気に惹きつけられた。

また病気で歌えなくなったカルト的ファンも多いシンガーソングライター、ペロド・スアレス・ベルティス自身のバンド、ラ・バンダでは、本人が出ないにもかかわらず熱狂的な嬌声が飛び交い、改め

て彼の人気のもの凄さを目の当たりにした  
(17時45分～)。

一方、私の関心がより高かったのは、インディーズ&フュージョン(トロピカル含)部門の方だ。開演早々の11時のバリオ・カラベーラは、以前ここでも紹介した〔クンビア音楽の進化系、そんりさ166号、2018年10月〕リマ出身のスカ、レゲエ、クンビア、ロックなどを融合させた強面の兄ちゃんたちによるバンドだ(11時～)。あいかわらず甘い歌声で、時に政治的なメッセージも交えつつ、フェスなだけにしっかり踊らせても来るレパトリーに大盛り上がり。ファンたちが大きな旗をたくさんはためかせながら、踊って盛り上げているのも非常に印象的だった。また演奏後には希望者にポスターが配られたのも、まだお客が少ない午前中出演の醍醐味だったと言えるだろう。

そして12時から、今若者一番人気と言われるフュージョンバンド、オラヤ・サウンド・システムが登場。しかしまだ時間が早いため、残念ながらこちらもお客はまばら。レゲエバンドとしてスタートしつつ、クンビアやロックを取り入れてきたバンドという認識だったが、こちらも予想以上に政治的なテーマを歌っていて、こういったメッセージ性の復権が学生層を中心に一つのムーブメントになっているのかなと、改めて考えさせられた。

また都市中間層以上の若者に人気のあるテンブルサワーは、前からパツとしないと思っていが、実際に見ても、個人的には評価が変わらなかったバンドだった(13時～)。美女を侍らせたいいところのお坊ちゃん的イメージ戦略自体が個人的には気に食わないという偏見もあるのだろうが、それは個人的な好みでもあることはわかっている(でもどうやら女子に人気があるらしい)。

また14時から、2年前まで若者の間でもっとも人気の高いバンドであったバレトが登場した。ただ、メインボーカルのマウリシオ・メソネスが脱退して、今回も別バンドで出場している。マウリシオ脱退後、今回もバレトは別のボーカルを立てて演奏していたが、これまでの作品を封印して、ひたすら有名クンビア曲のカバー演奏に特化して踊らせる作戦に出ており、バレトが持っていたクールな曲の魅力が損なわれてしまっていたのは本当に残念だった。

一方、16時からのマウリシオ・メソネスの方は、



シャレオツなオラヤ

バレトの衣装を着てあえて出てきて、「間違えた！」と、あわてて着替えて再登場するなど、徹底的にバレトをコケにしつつ、会場を盛り上げる作戦に出ており、ステージ上で非常にこだわった演出で大いに笑いを取りつつ、こちらもダンスナンバーで対抗する、というものであった。個人的には、双方ともにバレトの名曲が全然聴けなかったのが非常に残念であった。

フュージョン系バンドとして、もう一つ楽しみにしていたバンドがあった。ラグナ・パイである(15時～)。オラヤがレゲエバンドとして結成されたが、どんどんクンビア化していったのに対し、ラグナ・パイは硬派にレゲエでありつつけることにこだわったバンドとして、非常に人気の高いバンドだ。

これまでなかなか生で見る機会もなかったのも、非常に楽しみにしていたのだが、実はかなり時間的余裕を持ってお昼ごはんの列に並んだにもかかわらず、待っている間に演奏が始まってしまい、ジリジリしながら待っているも、昼食をゲットしたときにはステージはほとんど終わっており、結局会場遠くから少し見るだけしかできないという大ぼかをやらかしてしまった。

これはなかなかのショックであった。でも遠目からでも彼らのステージの熱気は伝わってきており、せっかくだから間近で見たかった！という思いが更に募ったステージであった。

こうしたフュージョン系バンドのあと、後半はトロピカル祭りである。17時の大御所クンビアバンド、アグア・マリーナ以降、怒涛のクンビア、サルサ攻勢がロックステージに対抗するように盛り上げてくる。

そして、この17時を目指して、お客が一気になだれ込んできて、会場が超満員になってくる。大海を航行する船のように、ビールがひとびとの頭上を運ばれていき、歓声とともに人々は踊り狂う。まさにフェス。徐々に涼しくなるリマの夏を一番満喫できる時間の到来だ。

しかし、実はこの頃には、私はかなり疲弊していた。すでに8時間、日なたで立ちっぱなしで、元気いっぱいの新規入場者にむしろ圧倒されつつあった。それでもやっぱり、今なおペルーを代表するアグア・マリーナのステージは圧巻であった。全31出演者の中で、アグア・マリーナとアルモニア・ディエスのクンビア大御所の2バンドだけが、出演時間45分をもぎ取っており、別格扱いである（実はロックで1時間枠が一つだけあったことに後ほど気づいた）。

もう完全にここから、ダンスタイム宣言とでもいうかのように、一気に会場の空気が変わったのがわかった。そして18時15分からは、ジョシマル・イス・ヤンブー、そして19時15分からはダニエラ・ダルクールとペルーの人気サルサ・オルケスタが続く。知られざるサルサ大国でもあるペルーの誇るオルケスタの2つは、それぞれの味をうまく出しながらか見事に会場を盛り上げていた。

どうしてもちょっとコミカルな愛おしさがつきまとうクンビアに対して、サルサはあくまでもクールで、やっぱり同じトロピカル音楽と言われても、ぜんぜん違う音楽なんだなと、実感する。でもペルー人は関係なく、歌い踊りまくる。個人的には、クンビアも織り交ぜたジョシマルのステージよりもダニエラ・ダルクールの方がグッと来たが、これはあくまで個人の好みの範疇だろう。

このあたりになってくると、私の疲労も限界に達しており、いつまで会場にとどまるかを常に考えながらの観戦となってきた。

そんなわけで、ロックの大御所リオヤリビド一などもなんとなく流し、クンビアのトニー・ロサードやエルマノス・ジャイペンもさらっと聴いて、最後にカバーサルサで定評のあるサペロコを聴いて、帰ろうと思っていたら、まさかの出演順の入れ替えで、アルモニア・ディエスの演奏が始まった。そしておそらく15年ぶりぐらいに聴くアルモニア・ディエスの熱狂的なステージを聴いたところで、満足して帰途についた。



大盛り上がりのアルモニア 10

これが超駆け足ながらのペルーの人気バンドをパノラマ的に俯瞰できるフェス、「第6回アルテルナティボ・ミュージック・フェスティバル」の簡単な観戦記である。なんとなく面白そうだなと思ったバンドは、ぜひ、YouTubeなどでチェックしてほしい。今のペルーを牽引する都市ポピュラー音楽たちと出会えるはずだ。

第6回アルテルナティボ・ミュージック・フェスティバル  
(2020年2月29日)のプログラム構成

時刻	Rock & Pops	時刻	Indie & Fusion
10:00	La Fulana	10:20	Kinder
10:40	Plutonio de Alto Grado	11:00	Barrio Calavera
11:30	Amén	12:00	Olaya Sound System
12:30	Los Outsaiders	13:00	Temple Sour
13:30	6 Voltios	14:00	Bareto
14:30	Daniel F	15:00	Laguna Pai
15:30	We The Lion	16:00	Mauricio Mesones
16:30	Zen	17:00	Agua Marina
17:45	Pedro Suárez-Vértiz	18:15	Josimar y su Yambú
18:45	Tourista	19:15	Daniela Darcourt
19:45	Raúl Romero	20:15	Tony Rosaldo
20:45	Río	21:15	Hermanos Yaipén
21:45	Libido	22:15	Zaperoko
22:45	Vilma Palma e Vampiros	23:45	Armonia 10
00:30	Chabelos	01:00	Deyvis Orosco
01:30	Mar de Copas		

\* 1 : 3月29日、ペルーを出国、メキシコ経由で31日に無事帰国できました。

## ホセ・マルティ像を豚の血で汚辱

キューバは2019年に国家評議会議長（国家元首）・閣僚評議会議長（首相級）制から、大統領（国家元首）・首相（政府首班）制に替わり、国家評議会議長は人民権力全国会議（ANPP、国会）の議長が兼務することになった。同年4月公布の社会主義新憲法に基づく政治制度改革により、形式的ながら行政と立法を分離させたわけだ。ミゲル・ディアスカネル議長は大統領になり、首相にはマヌエル・マレーロ前観光相が就任した。新憲法は市場経済制度を初めて公認した。1959年元日の革命から60年経ち、社会主義体制を延命させ強化するには政経両面の改革が不可避と悟った最高指導者ラウール・カストロ共産党第1書記をはじめ革命遂行世代は、消えゆく前の最後の輝きを見せている今、極めて慎重ながら政治制度改革と市場経済公認によりようやく到達したのである。

ところが年末にシエゴ・デ・アビラ市中心街に「くたばれ革命」というペンキの落書きが現れた。以前だったら、この出来事がニュースとして伝えられることはなかった。だが今は違う。本人が落書きをSNSで拡散させ、ニュースにしてしまったのだ。これを受けて「カストロ一族と共産党独裁くたばれ」「政府は革命的でない。〈革命〉政権と言うのを止め〈独裁〉と呼べ」など激しい野次がSNS網を飛び交った。

明けた2020年元日、ハバナ市内各地にあるホセ・マルティの胸像が幾つも豚の血で汚された。

「クランデスティエーノス」（地下結社）を名乗る「器物損傷犯」らは汚されたマルティ像の写真をSNSに載せ、「これは我々の雄叫びだ！スマホはキューバ人に表現の自由をもたらした」とメッセージを發した。道路沿いにある大型の革命体制宣伝板の故フィデル・カストロ元議長の肖像も汚された。過去にはあり得なかったことだ。ディアスカネル大統領は、「そんな輩はキューバ人と呼ぶに値しない」と非難。当局は、「地下結社」の数人を逮捕したが、彼らは新たに「国民解放運動」を名乗った。2月上旬、サンティアゴ市内で8歳の女兒が強姦

される痛ましい事件が起きた。怒った住民多数が犯人を捕らえ私刑にしようとしたところ、警官隊が駆けつけ男を連行した。収まらない住民は群衆と化し、日常の不満を爆発させ、暴動状態となった。内務省軍部隊が出動し鎮圧したが、群衆は部隊に投石し抵抗した。政府は事態を重視し、ビデオ映像を基に私刑と暴動の煽動者や参加者を摘発した。

ハバナの革命広場近くでは、不良5人組が金品強奪のため大学生2人を襲い、うち一人を刺殺した。この種の凶悪事件はキューバでは稀で、警察は5人組を素早く逮捕した。ハバナでは2月末、地区のごみ回収箱に「捨てられたフィデルの肖像写真」がSNSで拡散された。「反体制」への心理的ハードルを下げるのを狙った宣伝工作だろう。これら一連の出来事は、「革命信仰」が律するキューバ社会のたがが相当に緩んでいるのを物語る。

キューバ経済は準備外貨が底をつき、ベネズエラ原油の供給量が大幅に減り、トランプ米政権による経済封鎖の厳格化で極めて苦しく、生活不満が社会に充満している。そんな空気は鋭敏な芸術家の作風に影響を及ぼす。視覚造形家ルイス・オテロは国旗を彩色によりデフォルメして発表、3月初め「社会資産損傷および国の象徴侮辱」容疑で起訴された。すると、オテロの所属する「サンイシドロ運動—文化と自由 2019」の仲間の芸術家や知識人が一斉に「不当逮捕」を非難し、早期釈放を要求した。

革命体制派の著名な歌手シルビオ・ロドリゲスさえ、「20世紀中葉に優れた芸術を創造したキューバは21世紀の今、破壊的な敵が絡む政治問題を多く抱えており、新たな政治問題になりうる若い芸術家への規制を止めるべきだ。キューバの未来は検閲ではない」と批判した。

サンイシドロ運動は、政府が18年8月、国の組織に属さない芸術家の活動を違法とする「政令349」（同年12月発効）が登場した直後に結成された。絵画、彫刻、ポスター、街頭パフォーマンスなどの自由が保障されてきたキューバだが、事、作風が「反革命」「反国家」となれば別。「蟻の一穴」から体制が揺らぐのを恐れる政府は、いかに糾弾されようとも、必要とあれば取締りを憚ることはない。

## メキシコ風ひき肉のコロッケ

Papas Rellenas de Carne Molida

ソマリサの読者のみなさんお元気ですか。

コロナウィルスのせいで多くの方が家にこもっているこの時期、外食ではなく、おいしいメキシコ料理を家で作るのが一番です。今回は、とてもおいしくて経済的で簡単な一品です。

15世紀にスペイン人が南米からジャガイモを持ちこんでから、メキシコではジャガイモを食べるようになりました。

それ以前、マヤ人たちは、紫や白のサツマイモを豚やイノシシ、七面鳥の肉といっしょに食べていました。サツマイモをゆでてパスタのようにして、さまざまな料理をつくっていました。ジャガイモがメキシコにもたらされ、人々は実に

### 材料 (4人分)

- ・合い挽きミンチ 400グラム
- ・ジャガイモ中 8個
- ・タマネギ小 1個
- ・トマト中 2個
- ・卵 2個
- ・粉末パプリカ 少々
- ・粉末クミン 少々
- ・塩 適量
- ・コショウ 少々
- ・サラダオイル
- ・小麦粉

### 作り方

- (1) ジャガイモを洗ってやわらかくなるまでゆでる。
- (2) タマネギの皮をむき、みじん切りに。
- (3) トマトを洗って細かく切る。
- (4) フライパンで、油は使わずにひき肉を炒める。肉の色が変わったら、タマネギとトマト、クミン、塩コショウを加える。よく火が通るまで混ぜながら炒める。



写真のソースは、マスタードとマヨネーズ、オリーブ・オイル、ごく少量のウスターソースを混ぜたものです

多彩な料理をつくりはじめました。今回の料理もそのひとつです。

- (5) ゆでたジャガイモを冷たい水に入れて、皮をむき、大きめの容器のなかでペースト状にする。それを適当な大きさに丸める。
- (6) ジャガイモのペーストを丸めたなかに、スプーンで炒めたひき肉を埋めこむ。
- (7) 深めの皿に小麦粉を出しておき、別の皿に生卵をよくかき混ぜておく。
- (8) 炒めたひき肉を入れたジャガイモのボールに、手で小麦粉をはたく。
- (9) 卵につけて、平皿に置いておく。
- (10) 大きめのフライパンに十分なサラダ油を入れ、むらがないように気をつけて揚げる。
- (11) 揚げたものを平皿に盛り付ける。
- (12) お好みのソースをかけ、ごはんやフランスパンといっしょにどうぞ。

## （1）ボルソナロ大統領に抵抗する先住民

ボルソナロ大統領就任以降、アマゾン地域は前例のない森林破壊に直面し、森林保護警備を担ってきた先住民への暴力や脅迫は拡大している。鉱山業者や伐採業者による先住民保護区侵入が増え、先住民指導者7人が殺害された。2019年11月、弁護士や人権団体は大統領を先住民に対するジェノサイドの罪で国際刑事裁判所に告訴した。開発推進のため、保護区政策終了、国立先住民保護基金予算削減、環境規制撤廃を打ち出し、30万の不法状態の土地所有権の合法化を目論んできた。

近年の研究によると、先住民が管理する地域の生物多様性が優れている。バイア州の先住民地域のカーポラ計画は、野生動物が戻れるように放牧地を森林に戻し、伝統的知識と最新技術を組み合わせ、森林回復と伝統的な生活様式を保持しようとする。アクレ州のアシャンカニやミナスジェライス州のパタソは、持続可能な農業の知識を非先住民社会に伝え、自然への敬意を伝えようとしている。ブラジル南部のグアラニー組織は、食用として商業化でき野生動物の食料になるパラナ松の再植林を試みる。グアラニー環境協会メンバーは、何千人もの先住民を殺害した独裁政権時代（1964～85年）にまで後退したと指摘する。保護区侵犯を許さず、保護区の自主的設定を強調する。パラ州タパジヨス川域のムンデュルクは、弓や歌など先祖伝来の方策で不法伐採業者に対抗してきた。

政府に対する抵抗運動を展開してきた先住民は、土地と文化を防衛するため、社会運動と連携し、国際組織に先住民の権利が侵害されていることを訴え、暴力や迫害に屈さず領域にとどまると主張してきた。大統領就任後、先住民活動家は、土地の権利を防衛し、酷い対応に抗議するため、道路を占拠してきた。弁護団は、ハーグ国際司法裁判所の検察が告発状に基づき調査することを期待しているが、ブラジル市民と国際組織の支援が不可欠である。ボルソナロ氏起訴は、国際的な圧力が先住民の期待するぐらい大きくなるかどうかにか左右される。

出典：GLOBAL IDEAS 2020年1月14日より

## （2）先住民の抵抗が高まるサラヤク

サラヤクはエクアドル・アマゾン地域の7集落で構成される人口約1,400名のキチュアの先住民共同体である。2019年10月、モレノ政権の燃料補助金廃止を契機に、サラヤクの男女100名はカヌーとトラックを乗り継ぎ首都に赴き、他の先住民組織とともに抗議行動を展開した。政府交渉に参加したエクアドル先住民連盟（CONAIE）代表団の唯一の女性はサラヤク代表のミリアン・シセネロスで、夫のマロン・サンティもパチャクティック多民族統一運動代表として参加した。

1992年5月、ボボナソ川流域の約13.5万haがサラヤク共同体領域として認知されていた。しかし、1996年、政府は領域にまたがる約20万haの開発権をアルゼンチン資本の石油会社（CGC）に認めた。2002年末、CGCは領域内で試掘調査を開始した。サラヤクは国内外ONGと協力し、粘り強く抵抗運動を展開した。米州人権裁判所裁定が下ったのは提訴から8年後の2012年、政府の正式謝罪と賠償金支払は2014年だった。判決にあった埋設された火薬撤去は実現していない。

サラヤクは二言語教育、通文化医療、女性の参加などが実践されている。それはコレア政権（2007～17年）が掲げた「多民族国家」や「よく生きる（buen vivir）」という看板政策ではなく、長年にわたる闘争・抵抗の過程を通じて獲得したものである。サラヤクは多くの外国人が訪問するエクアドルの先住民共同体で、気候変動、熱帯雨林保護、先住民の人権、先住民知識の活用など、様々なテーマに関する会議や集会在組織され、若者たちも国際集会の舞台上で積極的に発言している。



政府交渉で発言するミリアム 第3回若手リーダー集会の様子  
出典：Desinformémonos, 2020年2月3日より

[https://www.youtube.com/watch?time\\_continue=72&v=vbEQmkSzUG8&feature=emb\\_logo](https://www.youtube.com/watch?time_continue=72&v=vbEQmkSzUG8&feature=emb_logo)

### (3) 3月9日、ラパスでの力強い女性デモ

2017年、米国のフェミニスタは、女性に対する暴力や父権主義の告発や女性差別撲滅を掲げ、国際女性デーの女性ストライキを呼びかけ、LA 諸国でも女性ストライキが実施されだした。今年は当日が日曜日のため、女性労働者ストライキ (Un día sin mujeres) の原則に基づき、3月9日にストライキは実施された。3月8日、ボリビア大統領を僭称するアネスは、ラテンアメリカ開発銀行基金をもとにしたボリビア女性計画を発表し、「女性には最良、女性殺害者には最悪の知らせ」と宣言し、ラパスでは前大統領支持政党系の農民女性全国連合などが呼びかけた集会が実施された。

翌日、資本主義・父権主義・人種差別・ファシズムと戦う女性グループが呼びかけたデモの基本スローガンは、「クーデタも、女性殴打も反対 (Ni golpe de Estado, ni golpe a las mujeres)」というものだった。それ以外にも、賃金差別反対、3交替制反対、政治囚釈放、拷問反対、中絶の権利・性的多様性・ポジェラ (アンデス女性衣装) ・ウィファラ (アンデス民族旗) などの尊重、環境破壊反対など、スローガンは多岐にわたっていた。

約7千人参加のエル・アルトから首都ラパスまでのデモ行進の先頭は、昨年11月政変時のエル・アルトやラパス (センカタ、サカバ、オベフヨ) での弾圧犠牲者家族だった。民族衣装姿のチョラ、建築労働者、主婦、フェミニストなど参加者の多くは独立的グループだった。「エボ、メサ、アネス、父権主義政党ども。社会運動を利用しやがって」、「我々は左翼でも右翼でも MAS でもない」、「クーデタ実行犯アネス。あんたはファシスタだ」というシュプレヒコールが支配的だった。



デモの呼び掛けチラシ

センカタ虐殺犠牲者集団

出典 : <https://muywaso.com/historicas-y-diversas-la-contundente-marcha-feminista-en-el-alto-y-la-paz/>

### (4) チアパス先住民、聖週間行事実施

COVID-19 感染による死者2名、陽性38名に達していたメキシコ・チアパス州政府の厚生部局は、聖週間の諸行事の実施を見合わせを通過していた。カンクックのように、この通達に従って伝統的行事の参加者を制限した行政区もみられた。しかし、ベヌスティアノ・カランサ、ボチル、シモホベル教区などでは、教区司祭が先導する金曜日のキリストの道行き (Viacrucis) に安全距離を無視した形で数千人の信者が参加したという。

一方、ローマ・カトリックとは異なる独自の民俗的カトリックを築き上げてきたチアパス高地の先住民共同体 (チャムーラ、チェナロオ、カンクック、オシュチュック、パンテロオなど) では、通達が無視され、「枝の主日 (日曜日)」、「キリスト受難 (金曜日)」、「ユダの火刑 (土曜日)」などの伝統的行事が実施された。

チアパス高地で最大の人口のチャムーラ首長ボンシアノ・ゴメス (MORENA 候補) は、米国から里帰りした住民が多い現状を踏まえ、「ユダの火刑」の挙行を控えるように要請した。しかし、2018年選挙で当選した首長は、不当に MORENA 候補になったとするファン・シロン・ゴメス支持者に役場を占拠され、役場で業務できない状況が続いていた。

ファン・シロンは共同体の多数が支持した「慣習選挙」で選出された行政区審議会代表で、伝統的宗教権威者の意向を尊重し、聖週間の諸行事を取り仕切ることになったのである。「コロナウィルスはカシュラン (非先住民) がかかる病気だから、我々は感染しない」として、一連の行事が強行されたというが、感染者の発生は確認されていない。



行進を先導するシロン



ユダ火刑。燃え尽きると群衆が足蹴に

出典 : <https://www.excelsior.com.mx/nacional/ignorancia-covid-19-y-queman-a-judas-en-san-juan-chamula/1375509>

お正月を過ぎた頃から、コロナウィルスが話題が始まり、今ではそれが日常に。  
 小学校が休校になり、学童に行く娘の毎朝のお弁当作りに、大阪への通勤では電車の中ではつり革を持たないで乗るという条件まで加わり、気がつけばもう4月。  
 世界中が先が見えない状況になり、ただただ今は、自分の免疫力を上げておくしかないと思う日々です。  
 レコムの総会も、毎年6月に開催していますが、今のところメンバーで集まることは難しそうです。可能であれば、リモートでの開催でもできたらと思います。  
 あー、こういう時ほど、メキシコの屋台でポソレでも食べたいな、と思ってしまう私です。

嘉村 早希子

今回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2020年7月11日（土）

発送作業は関西で、2020年7月18日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 171 革命から40年を迎えたニカラグアの今	Vol. 168 AMLO、新自由主義政策と決別か
Vol. 170 ベネズエラ・カラカスの混沌とした日々	Vol. 167 混迷が続くニカラグア
Vol. 169 対話による解決を訴えるベネズエラ左派の声	Vol. 166 AMLO 津波的勝利の後には
	Vol. 165 闘う女性たちの集会
	Vol. 164 グアテマラ・帰還難民のムラの20年

**メーリングリスト**  
 レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。  
 入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org までご一報ください。  
 メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

**会員の種類**

☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出  
 ☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出  
 ☆賛助会員：年 10,000 円（一口）総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出  
 ☆購読会員：年 4,000 円 『そんりさ』の購読、 **会員募集中です**

レコム連絡先 〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方 TEL 075-862-2556（留守電） お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。 ホームページ：http://www.jca.apc.org/recom E-mail : recom@jca.apc.org Facebook : https://www.facebook.com/recomsonrisa/	郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協カネットワーク レコム口座 118万1270円 グアテマラ基金口座 119万2024円 (2020年4月現在) そんりさ (SONRISA) 172号 2020年4月11日発行 日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM) 定価 400円
--	--